

戦略を聴く

「科学的に説明できる農業」を掲げ、イチゴを栽培しています。栽培しているのは、「紅ほっぺ」や「かおり野」など約30品種。今年2月には、一般社団法人の主催する「第1回全国いちご選手権」で、私たちのビニールハウスで育てた「あまりん」写真が最高賞を受賞しました。

甘くておいしい実を育てる秘密は、日射量やハウス内の二酸化炭素(CO₂)濃度、土壌の養分などのデータ収集です。天候などに合わせてハウス内の室温や

イチゴ栽培 データで管理

ヒロファーム(春日部市)

中村 知由 社長 40

ヒロファーム イチゴの生産・販売のほか、研修生に栽培実務を教える人材育成や、イチゴ農家に経営・栽培方法を助言するコンサルティングを手がける。パート・アルバイトを含む従業員17人、栽培面積は57.6アール(数字は23年10月時点)。

湿度などを調整することで、イチゴの光合成速度を

最大にし、糖度の高い実をつけさせています。

父や祖父は、農家にビニールハウスなどの農業資材を販売していました。そのため小さい頃から、多くの農家が高齢化や後継者不足に悩んでいるのを目にしており、「資材を売るだけでは生き残れない」という思

いを持っていました。

2005年、農業先進国のオランダを父が訪問する機会があり、トマトやバラなどの栽培データを集めて育成に活用していることを知りました。

国内の農業は、ベテランの経験や勘に頼って作物を育てています。データに基づいた科学的な栽培を行えば、誰でも高品質の作物を栽培できるはず。オランダのようにデータを取り入れて効率性を高め、農業で稼げるようになれば、若い世代が農業の世界に飛び込めるようになるのではないかと考えました。

◇

国内ではハウス内で一般客にイチゴ狩りを楽しんでもらう観光農園が増えており、農家にイチゴの育成方法を助言するコンサルティングを本格的にスタートしました。

イチゴは自分のことを話してくれませんが、センサーを設置してハウス内の状態

を「見える化」し、最適な環境を整える必要があると説明すると、多くの農家が関心を示してくれました。

人に助言するだけではなく、自分たちでイチゴ栽培を手がけたいという思いが強くなり、16年に自社栽培を開始。翌17年には、イチゴ栽培事業を分社化してヒロファームを設立し、コンサルティング先などから研修生を受け入れる人材育成事業も始めました。

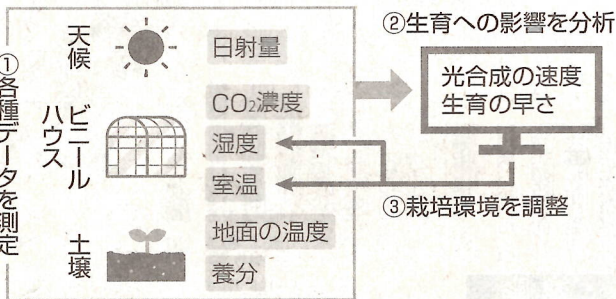
私たちは現在、室温などの環境を変えたハウス6棟でイチゴを育てています。品種ごとに最適な環境になるよう、細かな調整をすることで収穫量を増やしており、単位面積あたりの売上高は栽培を始めた時の約1・4倍に伸びました。

経験と勘に頼った農業の常識をくつがえしたいという思いが私の原動力です。今後も「もうかる農業」の担い手を増やしたいと思っています。

(聞き手・服部菜摘)



センサーで生育環境を確認し、「甘くておいしいイチゴを育てる」と話す中村社長(9月21日、春日部市で)



最適な環境でイチゴを栽培する仕組み